

# 琥珀の完璧な王国

人里離れた溪谷の村に生まれたその男は、幼くして孤児となり、幼女強姦未遂事件を起こして精神病院に収容される。死ぬまで過ごすこととなった病室で彼は、二万五千ページにも及ぶ、架空の自伝を創作する。文章、ドロイーイング、コラージュ、楽曲で構成される物語の中で、彼は全世界を冒険し、美しい宮殿や珍しい動植物と出会い、災難にも打ち克ち、無尽蔵の財力と権力で巨大創造物を構築した。

男は雑貨屋を営んでいた。第二次世界大戦中、店をドイツ軍に奪われると、弟の家の屋根裏部屋に隠れ住んだ。戦争が終わっても決してそこから出ようとせず、差し入れを持って来てくれる人たちとの接触も拒んだ。風邪をこじらせて彼が死んだあと、屋根裏から非常に小さなサイズのドロイーイング、約五百点が発見される。題材はすべて人の顔で、小さきまぎまぎな顔が連なり合い、含まれ合いしながら際限なく細密に紙面を埋め尽くしている。時折、胴体へとつながろうとする線が現れ、解放の予感がよぎるものの、すぐさま顔に引き戻される。

放浪の子ども時代を送った男は読み書きができなかった。やがて



# 小川洋子

移動露天商となり、独学で絵を描きはじめる。その高度な線描画のテーマは、守銭奴、鳥、蛙、魔法の城などで、屋台に飾っては、気に入ってくれた客に二束三文で分けてあげていた。やがて画廊に才能を認められるようになったが、いわゆる専門家との付き合いを毛嫌いした彼は、自分の展覧会が開かれている画廊の前で露店を開き、通りがかりの人にただ同然で絵を売った。

彼らは実在したアール・ブリュットの芸術家たちである。作品集『アウトサイダー・アート』（求龍堂）に掲載されている作家の中から三人を選び、略歴を参考にしてまとめてみた。もっとも彼ら自身は、芸術家などと呼ばれることを嫌がったかもしれないが。

一九四五年、フランスの画家ジャン・デュビュッフエによって命名されたアール・ブリュット（生の芸術）は、専門の教育を受けていない人たちが、美術の世界の枠を超えたところで生み出す芸術である、と説明文にはそうあるのだが、最初にこの作品集を開いた時、私は誰か未知の小説家の創作ノートを盗み見しようとしたように陥った。しかも、神様に祝福された小説家だ。この絵一枚、あるい

コスモス・ライブラリー

発売元：星雲社

## 最新！トランス

### パーソナル心理学法

諸富祥彦・日本トランス

パーソナル学会 [共編]

トランスパーソナル心理学の最新技法20の理論、基本的な考え方、技法の実際、具体的な対話例から一人でできるワーク(エクササイズ)までを網羅!

日本におけるトランスパーソナル心理学の全体像を示し、しかも、実用的に各アプローチの技法に着目して紹介。瞑想、祈り、ヨガから、エニアグラム、プロセスワーク、さらにはバイロン・ケイティ・ワークやディマティーニ・メソッド、ファミリー・コンステレーション・ワークといった最新技法まで!

それぞれのセラピーを用いた具体的な対話の場面、自分で取り組むことのできる誌上ワーク(エクササイズ)まで示した画期的な本!!

定価 [2400円+税]

## ファミリー・ コンステレーション

隠された愛の調和

パート・ヘリンガー原著/グンタード・ヴェーバー+ハンター・ボームント

編者/小林真美訳

ファミリー・コンステレーションとは、愛情のつれに起因する諸問題を人間関係のシステムに「隠された愛の調和」を取り戻すことで解決することを目指すもの。その法則を理解し、身をまかせるとき、愛は翼を広げる方法を思い出し、苦しんでいる家族や個々の人々の前に解決が自ら姿を現す。

ファミリー・コンステレーションの創始者パート・ヘリンガーの著書。

待望の邦訳!

定価 [2500円+税]

## 吉福伸逸の言葉

向後善之助著

トランスパーソナル心理学を超えて  
追及した真のセラピーとは?

トランスパーソナル心理学を始めたとするニューエイジ・カルチャー導入の立役者、吉福伸逸の軌跡を辿り、後年にかけて集中的に追及したユニークなセラピー理論とそのワークの実際を初めて紹介。さらに、啓発的な99の言葉を「変化と葛藤」「セラピー」「社会」に類別して、それぞれに周到な解説を加えた。

定価 [1700円+税]

113-0033 東京都文京区本郷3-23-5  
Tel: 03-3813-8726 Fax: 03-5684-8705  
<http://www.kosmos-lby.com>

はこの略歴数行に足を踏み入れ、探索してゆけば、どんな小説が書けるのだろうか。ああ、もしこの創作ノートが自分のものだったら……と夢想した。

それほどにアール・ブリュットの世界は、魅惑的な物語にあふれている。作品も作者の人生も、その根底に人間の不思議を潜ませ、暗闇を飲み込み、はっと息を飲んで立ちすくむような奥深さを湛えている。彼らは大声で自らの存在を主張しない。有名になりたいなどと願ったりしない。現実からの要求に応えるのではなく、自分にとっての宇宙を作り出してしまふ。革新的であるうと、現実世界でもがく芸術家たちをよそに、彼らは他の誰も想像できない言語で思考し、メロデューを奏で、色と形を操っている。組成の異なる空気を吸っている。彼らの宇宙に憧れを抱きながら、とてもそこへ近づくことなどできない、しかしもし自分に何か方法があるとすればやはり、小説以外にないだろうと思っただけで書いたのが、拙著『琥珀のまたたき』である。図々しくも秘密の創作ノートを本当に盗み見た、と言えるのかも知れない。

主人公の少年、琥珀は、父親が残した膨大な図鑑の片隅に、自らの王国を建設する。住人はママときょうだい、あとは蝶々やロバやシロツメクサやデージーだけのささやかな世界だが、幼女強姦未遂事件の男が残した自伝の巨大さに匹敵するスケールを備えている。そして少年は雑貨屋の店主と同じく、生涯小さな場所に閉じこもり、放浪の露天商のように、自分の作品でお金をもうけようなどとは考えもしなかった。年老いてから芸術家専用の老人ホームに迎え入れられ、展覧会が開かれた時にも、彼の心を占めていたのは誇らしきではなく戸惑いだった。

この小説のため取材させていただいた、アール・ブリュットの専門家、アートディレクターのはたよしこさんの言葉が忘れられない。「彼らには失敗もスランプもありません」

私の小説はいつでも失敗だらけだが、『琥珀のまたたき』の中で琥珀が築き上げた世界は、彼にとつて完璧な王国であると、私は信じている。

(おがわ・ようこ 作家)